

Adabas

リリースノート

バージョン 8.1.3

June 2008

This document applies to Adabas Version 8.1.3 and to all subsequent releases.

Specifications contained herein are subject to change and these changes will be reported in subsequent release notes or new editions.

Copyright © Software AG 1971-2008. All rights reserved.

The name Software AG™, webMethods™, Adabas™, Natural™, ApplinX™, EntireX™ and/or all Software AG product names are either trademarks or registered trademarks of Software AG and/or Software AG USA, Inc. Other company and product names mentioned herein may be trademarks of their respective owners.

目次


1 Adabas 8.1 リリースノート	1
2 サポートされるプラットフォーム	3
3 バージョン 8.1.3 の拡張機能	5
ADAWRK ユーティリティ -- ワークエリアリカバリレポート	6
データベース ID による Adabas SVC ルーティング	6
CICS ハイパフォーマンススタブルーチンのサポート	7
PRILOGC 出力プログラムのサポート	7
ACBX の変更点	8
z/VM 環境でのトリガおよびストアドプロシージャのサポート	8
その他の Software AG 製品の拡張機能	8
4 バージョン 8.1.1 および 8.1.2 の拡張機能	11
論理エクステンットの制限の解除	12
物理エクステンットの制限の解除	12
GCB の拡張	12
MU および PE の制限の拡張	13
拡張システムファイル番号	14
スパンドレコードのサポート	14
ラージオブジェクトフィールドのサポート	15
ダイレクトコールの変更点	15
新しい拡張 Adabas コントロールブロック (ACBX)	16
新しい Adabas バッファ記述 (ABD)	16
バッファの拡張機能	16
FDT の拡張機能	18
コマンドの変更点	18
SVC の拡張機能	18
ユーティリティの拡張機能	19
ADARUN パラメータの拡張機能	25
コマンドログのタイムスタンプの変更点	26
PRILOG 出力プログラムの更新	26
ユーザー出口 11 およびサンプル出口 UEX11UX1	27
ロング英数字 (LA) フィールドの変更点	27
I/O の最適化	28
インストールの更新	28
新しいライセンスコンポーネント	29
BS2000 の拡張機能	29
拡張 MU/PE フィールドのハイパー出口のサポート	29
5 廃止された機能	31
6 制限および制約事項	33
7 Adabas データセットの互換性	37
ファイルのインポート	38
セーブデータセット	38
アンロードデータセット	39
ADAORD DD/FILEA データセット	39

シーケンシャルプロテクションログ	39
8 ZAP データセット	41
9 Software AG 製品の互換性	43
10 サポート期限	47
11 ドキュメント	49
Windows XP SP2 環境での Software AG 製品ドキュメントの表示	50
12 以前のリリースノート	53
目次	55

1 Adabas 8.1 リリースノート

このリリースでは、旧リリースの Adabas で設定されていた制限の多くが解除され、Adabas のストレージ機能と利便性が向上しています。この document では、Adabas 8.1 に含まれる新機能と変更された機能の概要を簡単に説明し、さらに詳しい情報を参照するために Adabas マニュアル内の他のセクションへのリンクも記載しています。

Adabas 8 では、広範囲に及ぶ機能が更新されました。このため、Adabas 8 のインストールを進める前に、必ずを参照してください。このマニュアルでは、Adabas 8 のアーキテクチャの変更と新機能に加え、Adabas 8 と旧バージョンの Adabas との互換性および移行の問題について説明しています。Adabas 8 に予定されている機能の一部には、このリリースではまだご利用いただけないものがありますので、ご注意ください。

 **Important:** 提供されたすべての Adabas 8 のメンテナンスを提供時の状態のまま適用し、Adabas 8 パッチレベルライブラリ (L00n) を提供時の状態のまま連結したことを確認してください。これにより、Adabas 8 のコードは最新に保たれ、すべての Adabas 8 の機能の拡張とメンテナンスがサポートされます。

最新リリースの Adabas よりも前のリリースの Adabas から、このリリースにアップグレードする場合（例えば、Adabas 7.4.3 から Adabas 8.1.2 にアップグレードして、Adabas 7.4.4 への中間アップグレードをスキップする場合）、スキップするリリースのリリースノート参照し、お使いのソフトウェアの更新時以降に Adabas に実装された変更についてよく理解してください。Adabas 7 のリリースノートは、「[以前のリリースノート](#)」に含まれています。

このdocumentでは、次のトピックについて説明します。

● サポートされるプラットフォーム	Adabas 8 で現在サポートされているオペレーティング環境の一覧です。
● バージョン 8.1.3 の拡張機能	Adabas 8.1.3 の新機能および変更された機能について説明します。
● バージョン 8.1.1 および 8.1.2 の拡張機能	Adabas 8.1.1 および 8.1.2 の新機能および変更された機能について説明します。
● 廃止された機能	Adabas 8 でサポートされなくなった Adabas の機能の一覧です。
● 制限および制約事項	Adabas 8 に現在適用されている制限および制約事項の一覧です。
● Adabas データセットの互換性	Adabas のリリース間での Adabas データセットの互換性について説明します。
● ZAP データセット	Adabas の ZAP データセットについて説明します。
● Software AG 製品の互換性	Adabas 8 とその他の Adabas 製品の互換性について説明します。
● サポート期限	Software AG 製品のサポート期限を確認する方法について説明します。
● ドキュメント	このリリースの Adabas で提供されるドキュメントについて説明します。
● 以前のリリースノート	Adabas の過去のリリースノートへのリンクを紹介します。

2 サポートされるプラットフォーム

Adabas バージョン 8.1.3 は、次のオペレーティング環境向けにリリースされています。

- z/OS：現在 IBM がサポートしているすべてのバージョン
- z/VM：現在 IBM がサポートしているすべてのバージョン
- VSE：現在 IBM がサポートしているすべてのバージョン

Adabas 8 の 8.1.3 より前のバージョンは、次のオペレーティング環境向けにリリースされていません。

- z/OS：現在 IBM がサポートしているすべてのバージョン
- z/VM：現在 IBM がサポートしているすべてのバージョン
- VSE：現在 IBM がサポートしているすべてのバージョン
- BS2000：現在 Siemens がサポートしているすべてのバージョン

3 バージョン 8.1.3 の拡張機能

- ADAWRK ユーティリティ -- ワークエリアリカバリレポート 6
- データベース ID による Adabas SVC ルーティング 6
- CICS ハイパフォーマンススタブルーチンのサポート 7
- PRILOGC 出力プログラムのサポート 7
- ACBX の変更点 8
- z/VM 環境でのトリガおよびストアドプロシージャのサポート 8
- その他の Software AG 製品の拡張機能 8

このchapterでは、Adabas のバージョン 8.1.3 で追加された拡張機能について説明します。

ADAWRK ユーティリティ -- ワークエリアリカバリレポート

このリリースには、ADAWRK ユーティリティと呼ばれる新しいユーティリティが導入されています。このユーティリティは、データベースの自動再スタートが失敗して、データベースが起動しないときに使用できます。このユーティリティを使用すると、WORK パート 1 のレコードからレポートが生成され、このレポートで次のことが可能になります。

- 時間のかかるデータベースのリストア／再生成（ADARES ユーティリティ、GENERATE 機能）を実行する必要があるかどうかを判別できます。
- データベースを簡単に修復して、以前よりすばやく起動および機能するようにできるかどうかを判別できます。

ADAWRK ユーティリティの詳細については、「ADAWRK ユーティリティ：ワークエリアリカバリレポート」を参照してください。

データベース ID による Adabas SVC ルーティング

z/OS 環境のアプリケーションプログラムでは、Adabas リンク ルーチンを使用し、コール内のデータベース ID に基づいて、特定の Adabas SVC を通じたデータベース コールルーティングが可能です。このリリースの Adabas には、このようなアプリケーションプログラム用の機能が導入されています。SVC のルーティングは、ユーザーが設定する DBID/SVC ルーティングテーブルによって管理されます。詳細については、「Adabas データベース ID による Adabas SVC ルーティングの確立」を参照してください。



Notes:

1. クライアントベースの機能を動作させるには、すべてのセッションにおいて複数のルーターを通さずに、単一のルーターを通して経路を決定するため、Adabas Transaction Manager などのクライアントベースの Adabas アドオンには、この機能との互換性がありません。
2. ADASVCTB とリンクした ADALNK は、アプリケーションプログラムのみにより使用される必要があります。また、Adabas ニュークリアスまたは Entire Net-Work に使用させることはできません。



Caution: この機能の使用には注意が必要です。トランザクションの完全性は保証されません。あるアプリケーションが、複数の Adabas SVC にルーティングされる複数のデータベースにコールを行う場合、1つのデータベースのトランザクションに影響する可能性がある ET、BT、OP、CL、RC、またはその他の Adabas コマンドの発行が可能です。それ以前にアクセスされた、異なる Adabas SVC 上で実行している他のデータベースに対し

では発行できません。したがって、複数の Adabas SVC が使用されている複数のデータベース間で、トランザクションの整合性を確実にするために必要なロジックがすべてアプリケーションプログラムに含まれている必要があります。

この機能により、2つの新しい LGBLSET マクロ（リンクグローバルテーブル）パラメータ、DYNDBSVC と DBSVCTN が使用できます。DYNDBSVC は Adabas SVC ルーティング機能のオンとオフを切り替えるために使用し、DBSVCTN はこの機能がオンのときに使用する DBID/SVC ルーティングテーブルを特定します。

CICS ハイパフォーマンススタブルーチンのサポート

このリリースでは、Adabas 8 での CICS ハイパフォーマンススタブルーチンがサポートされるようになりました。Adabas ハイパフォーマンススタブルーチンは、Natural バージョン以外の言語（アセンブラ、COBOL、PL/I など）で書かれたアプリケーションに対する Adabas CICS コマンドレベルリンクコンポーネントで利用可能なダイレクトコールインターフェイス（DCI）機能を拡張します。



Note: スタブルーチンは Adabas CICS コマンドレベルリンクコンポーネントで使用する必要があります。スタブルーチンは Adabas CICS/VSE マクロレベルリンクコンポーネントで正常に機能しません。Adabas バージョン 8.1.3 ライブラリで提供される LNCSTUB モジュールは、Adabas バージョン 7.4 CICS リンク ルーチンを使用しても正常に動作します。

Adabas 8 での CICS ハイパフォーマンススタブルーチンの詳細については、「*Adabas 8 用 CICS ハイパフォーマンススタブルーチンのインストール*」を参照してください。

PRILOGC 出力プログラムのサポート

Adabas の PRILOGC 出力プログラムを使用すると、バージョン 5 またはバージョン 8 のコマンドログレイアウト形式の Adabas コマンドログの内容を読み込み、出力することができます。

PRILOGC の詳細については、「*PRILOGC（コマンドログの出力）*」を参照してください。

ACBX の変更点

ACBXERRE フィールドの機能は変更され、ACBXERRF と呼ばれる新しい 2 バイトのフィールドに移動しました。ACBXERRE は、1 バイトのフィールドのみ（従来は 3 バイトのフィールド）となり、現在は将来の使用のために予約されています。ACBXERRE フィールドを使用するアプリケーションをお使いの場合は、代わりに新しい 2 バイトの ACBXERRF フィールドを使用するようにアプリケーションを調整してください。新しい ACBXERRF フィールドには、ACBXERRA フィールドおよび ACBXERRD フィールドによって参照されるエラー（そのようなエラーがある場合）を含むバッファセグメントが格納されます。

最新の ACBX 構成の詳細については、「[拡張 Adabas コントロールブロック \(ACBX\)](#)」を参照してください。

z/VM 環境でのトリガおよびストアドプロシージャのサポート

このリリースでは、Adabas 8 による z/VM 環境でのトリガおよびストアドプロシージャのサポートが導入されています。このサポートは、Adabas 8 のこれまでのリリースでは提供されていませんでした。

このサポートを受けて、EXEC ファイル (TSPBLDM EXEC) が新しく提供されています。この EXEC を使用すると、任意のバージョンの Natural を選択してアセンブルすることができます (Natural 4.1 以降をインストールしてある場合のみ)。

その他の Software AG 製品の拡張機能

Adabas 8 のコードが更新され、次の表のように、他の Software AG 製品から Adabas 8 を使用するための機能が強化されました。

製品	拡張機能
Adabas Cluster Services	Adabas 8 の基本コードが更新され、Adabas Cluster Services 8.1 の高可用性がより強力にサポートされました。Adabas Cluster Services 8.1 で拡張された機能のすべての情報については、 <i>Adabas Cluster Services 8.1</i> のリリースノートを参照してください。
Adabas Review	Adabas 8 の基本コードが更新され、Adabas Review 4.4 の拡張機能がサポートされました。Adabas Review 4.4 で Adabas 8 の新しい CLOG レイアウトを使用できるようになり、パフォーマンスが向上しました。Adabas Review 4.4 で拡張された機能の詳細については、 <i>Adabas Review 4.4</i> のリリースノートを参照してください。
Event Replicator for Adabas	Adabas 8 の基本コードが更新され、Adabas 間のレプリケーションがより強力にサポートされました。また、Adabas 8 のコードが Event Replicator for Adabas 3.1 の拡張機能をサポートするように変更されました。この拡張機能には、Event Replicator

製品	拡張機能
	Administration 2.4 および Event Replicator Target Adapter 2.4 への拡張機能も含まれています。Event Replicator for Adabas 3.1 の拡張機能の詳細については、 <i>Event Replicator for Adabas 3.1</i> のリリースノートを参照してください。
Natural	Adabas 8 のコードが Natural バージョン 4 の Adabas インターフェイス モード (ADAMODE) の拡張機能をサポートするように更新されました。

4 バージョン 8.1.1 および 8.1.2 の拡張機能

▪ 論理エクステントの制限の解除	12
▪ 物理エクステントの制限の解除	12
▪ GCB の拡張	12
▪ MU および PE の制限の拡張	13
▪ 拡張システムファイル番号	14
▪ スパンドレコードのサポート	14
▪ ラージオブジェクトフィールドのサポート	15
▪ ダイレクトコールの変更点	15
▪ 新しい拡張 Adabas コントロールブロック (ACBX)	16
▪ 新しい Adabas バッファ記述 (ABD)	16
▪ バッファの拡張機能	16
▪ FDT の拡張機能	18
▪ コマンドの変更点	18
▪ SVC の拡張機能	18
▪ ユーティリティの拡張機能	19
▪ ADARUN パラメータの拡張機能	25
▪ コマンドログのタイムスタンプの変更点	26
▪ PRILOG 出力プログラムの更新	26
▪ ユーザー出口 11 およびサンプル出口 UEX11UX1	27
▪ ロング英数字 (LA) フィールドの変更点	27
▪ I/O の最適化	28
▪ インストールの更新	28
▪ 新しいライセンスコンポーネント	29
▪ BS2000 の拡張機能	29
▪ 拡張 MU/PE フィールドのハイパー出口のサポート	29

このchapterでは、Adabas のバージョン 8.1.1 および 8.1.2 に追加された拡張機能について説明します。

論理エクステントの制限の解除

Adabas の各ファイルエクステントのタイプごとの論理ファイルエクステントは 5 個に制限されていましたが、この制限は解除されました。定義できる論理ファイルエクステントの最大数には、ファイルのすべてのアドレスコンバータ、データストレージ、ノーマルインデックス、アップインデックスのエクステント情報がファイルコントロールブロック (FCB) 内に収まる必要があるという制約があります (エクステントの情報は、FCB の可変のセクション内に格納されます)。例えば、標準の 3390 デバイスタイプの場合、ファイルはタイプごとに 40 を超えるエクステントを持つことができます (他のタイプのエクステント数が少ない場合、1つのタイプのエクステント数はより多くすることができます)。Adabas 8 論理エクステントの詳細については、「Adabas 論理エクステント」を参照してください。

物理エクステントの制限の解除

Adabas データベースのアソシエータおよびデータストレージコンポーネントには、各 5 個以上の物理 (データベースコンテナ) エクステントを格納できるようになりました。これにより、それぞれ最大で 99 個の物理エクステントを設定できます。ただし、すべてのアソシエータ、データストレージ、およびデータストレージスペーステーブル (DSST) のエクステントのエクステント情報がジェネラルコントロールブロック (GCB) に収まる必要があるため、実際の最大数は、これよりも少なくなる可能性があります。例えば、標準の 3390 デバイスタイプでは、アソシエータ、データストレージ、および DSST の各エクステントの個数は 75 を超えることができます (他のタイプのエクステント数が少ない場合は、1つのタイプのエクステントをより多く持てます)。Adabas 8 物理エクステントの詳細については、「Adabas 物理エクステント」を参照してください。

GCB の拡張

Adabas 8 のすべての拡張機能に対応するために、ジェネラルコントロールブロック (GCB) が 1 ブロックから 2 ブロックに拡張されました。ジェネラルコントロールブロック (GCB) とは、これらの 2 つのブロックを示すようになりました。

MU および PE の制限の拡張

MU フィールドまたは PE グループのそれぞれのオカレンス数は、1 レコードあたり、191 から約 65,534 に増えましたが、実際のオカレンス数は、データブロックサイズの大きさ、デバイスタイプ、およびファイルタイプ（スパンドまたは非スパンド）に制限されています。すべての MU フィールドおよび PE グループ、およびその他のフィールドは、1 つの圧縮レコードに収まらなければなりません。スパンドレコード（Adabas 8 で導入）を使用すると、より多くの MU フィールドおよび PE グループを格納できます。

また、サブディスクリプタおよびスーパーディスクリプタを定義すると、レコードに含まれる MU フィールドまたは PE グループの数に影響する可能性があります。例えば、スーパーディスクリプタが PE グループと 1 つまたは複数の MU フィールドの組み合わせとして作成されていて、オカレンス数が多い場合、パフォーマンスおよびリソースの問題が発生する可能性があります。



Note: 拡張 MU および拡張 PE フィールドの過度の使用は、パフォーマンスやリソースの問題を引き起こす場合があります。これらの問題は、ワークストレージのオーバーフローを引き起こす可能性があり、その結果レスポンスコード 9 が返されます。この問題が発生した場合は、データベースの ADARUN LP のサイズを増加させます。

1 つのレコードに 191 個を超える MU または PE フィールドを使用する場合、ファイルがこれを使用できるように明示的に許可する必要があります（デフォルトでは許可されていません）。これは、新しい ADADBS MUPEX 機能または、ADACMP COMPRESS MUPEX と MUPECOUNT パラメータを使用して行います。

拡張 MU または PE が制限されたファイルが作成された場合、MU フィールドまたは PE グループのオカレンスカウントをレコードバッファの 1 バイトフィールドに読み込んではいけません。これを行うと、Adabas はレスポンスコード 55、サブコード 9 を返します。したがってフォーマットバッファで `xxc` エlementを使用してオカレンスカウントを読み込む（`FB='MUC.'` または `FB='MUC,1,B.'` など）すべてのアプリケーションは、オカレンスカウントを 2 バイト以上のフィールドに読み込ませるように（`FB='MUC,2,B.'` または `FB='MUC,4,B.'` など）変更する必要があります。

■ 191 を超える MU および PE オカレンスの特定

191 を超える MU および PE オカレンスの特定

圧縮レコード（ADACMP ユーティリティ）では、191 を超える MU および PE オカレンスがオカレンスカウントの先頭の `x'c0'` バイトによって示されます。このバイトは、レコードの圧縮時に ADACMP ユーティリティまたはニュークリアスにより設定されます。`x'c0'` インジケータバイトの後に、後続の MU または PE オカレンスカウントに使用されるカウントバイトの数を示すバイトが続きます。例えば、次のインジケータの場合を考えます。

```
x'c0020204'
```


この例では、`x'c0'` はこれが拡張カウントであることを示し、`x'02'` はカウントバイトが2つあることを示します。また、`x'0204'` は、このフィールドに516個のオカレンスが存在することを示します。

拡張システムファイル番号

すべての Adabas 8 システムファイル（CHECKPOINT、SECURITY、SYSFILES、および TRIGGER）に 5000 までの2バイトのファイル番号を指定できるようになりました。ただし、物理カップリングファイルのファイル番号は、引き続き 255 以下にする必要があります。いったん2バイトのシステムファイル番号を適用すると、ADACNV ユーティリティを使用して、データベースを Adabas 8 より以前のバージョンに戻すことはできません。

スパンドレコードのサポート

レコードのスパニングが導入され、論理レコードを複数の物理ブロックに格納できるようになりました。これは、MU および PE オカレンスの増加など、Adabas 8 で拡張された機能に対応するための変更です。詳細は、「スパンドレコードのサポート」を参照してください。

 **Note:** スパンドレコードのサポートは、ファイルに明示的に許可する必要があります。現在は、ADADBS RECORDSPANNING 機能、または ADACMP COMPRESS 機能の SPAN パラメータを使用してこれを行うことができます。

スパンドレコードをサポートするには、セカンダリアドレスコンバータが必要です。このアドレスコンバータは、セカンダリスパンドレコードの ISN を、セカンダリレコードが格納されているデータストレージブロックの RABN にマッピングするために使用されます。詳細については、「スパンドレコードの ISN の使用」を参照してください。

ラージオブジェクトフィールドのサポート

新しいフィールドオプションである LB を使用すると、ラージオブジェクトフィールドとしてフィールドを識別することができます。ラージオブジェクトフィールド (LB フィールド) は、理論的なサイズが最大で 2GB の英数字フィールドです。このようなフィールドは、ドキュメント (HTML、XML、Microsoft Word または PDF ドキュメントなど)、画像 (JPG や BMP ファイルなど)、またはその他の複合データなどを、データベース内の単一フィールドに保存するために使用されます。

Adabas は、LB フィールド値を LOB ファイルと呼ばれる個別のファイルに格納します。このファイルは、基本ファイルと呼ばれる LB フィールドを含むファイルと密接に関連付けられます。

LB フィールドの詳細については、「ラージオブジェクトオプション LB」、および「ラージオブジェクト (LB) フィールドの基本」を参照してください。

LB フィールドのサポートには、ユーティリティの拡張も含まれます。具体的には、ADACMP、ADADBS、および ADALOD ユーティリティに対する拡張が行われました。詳細については、「[ユーティリティの拡張機能](#)」を参照してください。

ダイレクトコールの変更点

Adabas 8 には、Adabas 7 以前に使用されていた従来の Adabas ダイレクトコールインターフェイスよりも強力な柔軟な新しい形式のダイレクトコールが導入されています。

- 1つのコマンドでデータベースに書き込まれたり、データベースから読み出されたりするデータを、隣接しない複数のバッファセグメントに分散させることができます。このため、物理的に連続した1つのバッファにまとめて置く必要はありません。
- 各バッファまたはバッファセグメントは、32 KB よりも大きくすることができます。実用上は、アプリケーションプログラムのワーキングストレージで許容される値が上限だと考えられます。

新しい形式のダイレクトコールは、ACBX ダイレクトコールインターフェイスと呼ばれ、[拡張 Adabas コントロールブロック \(ACBX\)](#) を使用します。古い形式のダイレクトコールは、ACB ダイレクトコールインターフェイスと呼ばれ、引き続き従来からの Adabas コントロールブロック (ACB) を使用します。

Adabas 8 では、両方の形式のダイレクトコールが解釈され、アプリケーションプログラムによって、ACBX インターフェイスを使用するか、ACB インターフェイスを使用するかをコールごとに選択できます。ダイレクトコールに ACBX インターフェイスを使用する必要があるのは、アプリケーションで ACBX の新しい機能 (複数のバッファセグメント、ラージバッファ) のいずれかを使用する必要がある場合だけです。

Adabas 8 より前のバージョンの Adabas では、ACB ダイレクトコールインターフェイスだけがサポートされています。これらのバージョンの Adabas で ACBX インターフェイスを使用するコールを受け取ると、レスポンスコード 22（無効なコマンド）が返されます。

詳細については、「*Adabas の呼び出し*」を参照してください。

新しい拡張 Adabas コントロールブロック (ACBX)

Adabas 8 で導入された新しい拡張 Adabas コントロールブロック (ACBX) は、隣接しない複数のラージバッファセグメントを使用して、データベース上のデータを読み書きする機能をサポートしています。これは、特にラージオブジェクト (LB フィールド) の読み書きに便利ですが、その他のすべてのフィールドに使用できます。

既存の ACB (非拡張) も引き続きサポートされ、既存のアプリケーションはこれまでどおり動作しますが、Adabas 8 の拡張機能を利用する場合は、新しい ACBX を使用する必要があります。

詳細については、「*Adabas コントロールブロックの構造 (ACB および ACBX)*」を参照してください。

新しい Adabas バッファ記述 (ABD)

Adabas 8 では、*Adabas バッファ記述 (ABD)* と呼ばれる新しい構造が導入されました。この構造は、ACBX インターフェイスのダイレクトコールで使用する必要があり、ACB インターフェイスのダイレクトコールでは使用できません。

ABD は、セグメント化された非連続バッファをサポートしています。各 ABD は、1 つのバッファセグメントを記述し、バッファセグメントの種類、場所、サイズ、およびその他の関連情報を示します。

詳細については、「*Adabas バッファ記述 (ABD)*」を参照してください。

バッファの拡張機能

ACBX ダイレクトコールインターフェイスの導入により、Adabas 8 ではダイレクトコールにさまざまなバッファ拡張機能を使用できます。

- ACBX インターフェイスダイレクトコールを実行する場合、マルチフェッチバッファ、パフォーマンスバッファ、およびユーザーバッファを新しく指定できるようになりました。

- Adabas のフォーマットバッファ、レコードバッファ、およびマルチフェッチバッファを複数のセグメントに分割できるため、ストレージ内に確保される領域が連続している必要はなくなりました。

フォーマットバッファとレコードバッファのセグメントは、対にして指定します。マルチフェッチ処理が必要なコールの場合、フォーマットバッファ、レコードバッファ、およびマルチフェッチバッファのセグメントを3つをまとめて指定します。

- 1つのバッファまたはバッファセグメント当たり 32 KB を超えるデータを指定できます。

詳細については、「バッファの定義」を参照してください。

また、ACB または ACBX のいずれかのダイレクトコールインターフェイスを使用して行われたダイレクトコールについても、フォーマットバッファ拡張機能を使用できます。

- ラージオブジェクト (LB) フィールドでは、フォーマット要素に長さゼロが指定されていると、レコードバッファのフィールド値に使用できるスペースの量が可変であり、実際のフィールド値によって変わることを示します。実際のフィールド値は実行時に決まり、レコードバッファの LB フィールド値の最初の 4 バイトに格納されて、その後フィールド値が続きます。長さ値は、LB フィールド値に 4 バイトの長さ指定値自体を加えた合計です。
- ロング英数字 (LA) フィールドおよび LB フィールドに限り、フォーマット要素の長さの代わりにアスタリスク (*) を指定できるようになりました。この指定を行うと、レコードバッファに確保されるフィールド値のスペースの大きさは可変になり、フィールドの実際の値に必要な大きさになります。実際のフィールドの長さは、実行時に決まります。ただし、長さゼロの指定とは異なり、レコードバッファでは LA または LB フィールド値の前に 4 バイト長フィールドは存在しません。フォーマット要素に対応するレコードバッファエリアには、フィールド自体の値のみが含まれます。

このようなフィールドの長さ指定の詳細については、「長さおよびデータフォーマット」を参照してください。

- 長さインジケータと呼ばれる新しいフォーマットバッファインジケータ (L) を使用して、LA または LB フィールド値の実際の長さを取得または指定できるようになりました。このインジケータは、アスタリスク表記のフォーマット要素と組み合わせられることが多く、この場合のフォーマット要素はフィールド値のみを指定し、長さインジケータが値の長さを指定します。詳細は、「長さインジケータ (L)」を参照してください。
- LA および LB フィールドの場合、フォーマット要素に指定できる固定長は、253 バイトから (理論上) 最大 2,147,483,647 バイト (2 GB) までです。

これらのバッファの詳細については、「バッファの定義」を参照してください。

FDT の拡張機能

バージョン 8 では内部 FDT 構造が拡張され、これらの大きな FDT は 4 個以上のアソシエータブロックを使用することができます。大きな FDT に必要な追加のブロックは、アソシエータのリリースペースから自動的に割り当てられます。下位互換性および変換に対応できるように、アソシエータ内の FDT 用の固定スペースが確保されます。

FDT でフィールドを定義するための新しいオプションが追加されました。

- ラージオブジェクトフィールドの定義には、新しい LB (ラージオブジェクト) オプションを使用できます。
- FDT の英数字フィールドおよびワイド文字フィールドの定義には、新しい NB (非空白圧縮) オプションを使用できます。このオプションを指定した場合、フィールドの末尾の空白が Adabas によって削除されなくなります。デフォルトでは、NB は指定されておらず、Adabas は英数字およびワイド文字の値を格納するときに末尾の空白を削除します。

FDT の更新の詳細については、「フィールドオプション」を参照してください。


コマンドの変更点

LF コマンドのコマンドオプション 2 に "I" を指定した場合、すべてのフィールド情報が新しい Adabas 8 内部形式で返されます。

ダイレクトコールの変更に加えて、前述のとおり、LB フィールドに対応するように LF コマンド機能が変更されました。コマンドオプション 2 に "S" を設定して LF コマンドを実行したときに、ラージオブジェクトフィールド (LB フィールド) が検出されると、LB フィールドの状態が F タイプのフィールドエレメントに戻されます。第 2 フォーマットバイト (エレメントのオフセット 7 またはバイト 8) のビット 6 が、このフィールドに LB (ラージオブジェクト) オプションが設定されたことを示すために設定されました。さらに、第 2 フォーマットバイトのビット 1 は、LB フィールドが、NB オプション付きで定義されているかどうかを示します。詳細については、「LF コマンド: フィールド定義の読み込み」を参照してください。


SVC の拡張機能

Adabas 8 には、新しい Adabas SVC が含まれています。この SVC は、下位互換性が完全に確保されています。つまり、新しい Adabas 8 SVC は、Adabas 7、またはそれ以前のデータベースで使用することができます。

 **Note:** Adabas 8 データベースを使用している以前の Adabas リリースから Adabas SVC を使用することは、できません。これを行おうとすると、Adabas 8 のデータベースは正常に初期化されません。

z/OS システムでは、新しい SVC のパフォーマンスが向上し、エラーリカバリルーチンが改善されています。新しい SVC では、SRB モードルーチンから TCB モードルーチンにワークが移行していることに注意してください。Adabas 8 SVC のパフォーマンスを分析する際は、この点を考慮に入れてください。新しい SVC では、SRB モードのオーバーヘッドが大幅に削減され、TCB モードのオーバーヘッドが若干増加しましたが、結果的には全体的な SVC のパフォーマンスは向上しています。

z/OS システムの新しい SVC では、Adabas ニュークリアスおよびその他の MPM サーバー（Entire Net-Work、Natural グローバルバッファプールなど）が APF 認可されている必要があります。クライアントプログラムからのコールを受け取って、そのコールに応答するサーバーとして自身を設定しようとする未認可のプログラムがあった場合でも、この APF 認可によって、Adabas SVC の使用を回避することができます。Software AG では、セキュリティリスクを軽減するため、APF 認可の実行を強くお勧めします。ただし、ご要望に応じて、Software AG では、この要件を省略する ZAP を提供しています。詳細は、Software AG サポートにお問い合わせください。

 **Note:** 一部のアドオン製品では、制限付き z/OS サービスを使用するために APF 認可が必要となる場合があります。このような場合でも、APF 認可が必要です。

ユーティリティの拡張機能

通常、Adabas ユーティリティはすべて、Adabas 8 の新しい拡張機能をサポートするように更新されています。このサポートの一部は、新規、または修正されたユーティリティパラメータの形で現れます。それ以外の場合は、サポートは内部的に追加され、ユーティリティの使用に影響はありません。

次の表では、このリリースでユーザーインターフェイスが変更された Adabas ユーティリティについて説明します。Adabas ユーティリティの機能の詳細については、「ユーティリティ」を参照してください。

ユーティリティ	変更の概要
ADAACK	ADAACK ユーティリティでは、スパンドレコードのサポートが提供されます。ただし ADAACK は、渡された ISN をプライマリ ISN、またはレコードの唯一の ISN と見なします。ISN がスパンドレコードのプライマリ ISN の場合、スパンドレコードの関連するすべてのセグメントレコードは、自動的にセカンダリアドレスコンバータ内でチェックされます。

ユーティリティ	変更の概要
	特定の ISN についてのエラー情報を出力する場合、ADAACK ユーティリティでは、レコードがスパンされている場合に、問題がプライマリ ISN とセカンダリ ISN のどちらかなのかを示すようになりました。
ADACDC	現時点では、スパンドレコードは ADACDC ユーティリティでサポートされていません。ただし、ADACDC 実行で IGNORESPANNED パラメータが指定されると、ADACDC 処理はスパンドレコードを無視して警告メッセージを発行し、処理を続行します。リターンコード "4" が返されます。
ADACMP	<p>ADACMP によって、COMPRESS 機能または DECOMPRESS 機能の FORMAT パラメータから作成される内部フォーマットバッファの長さが 64K バイトに制限されなくなりました。</p> <p>次の新しいパラメータが ADACMP COMPRESS ユーティリティに追加され、MU/PE 拡張、スパンドレコードおよび LB フィールドがサポートされました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ DATADEVICE パラメータは、スパンドレコードのセグメンテーションに使用されるデータストレージデバイスタイプを指定します。SPAN パラメータが指定された場合、ADACMP はスパンされた長い圧縮レコードをセグメントに分割します。このセグメントは、DATADEVICE パラメータで暗示的に指定されるデータストレージのブロックサイズよりわずかに小さくなります。 <p>SPAN パラメータなしで DATADEVICE が指定された場合、このパラメータは許容される最大の圧縮レコード長を得るために使用されます。長すぎる圧縮レコードは、エラーと見なされ、DD/FEHL データセットに書き出されます。</p> ■ HEADER パラメータは、ADACMP 圧縮ロジックが、非圧縮入力レコードの中にセグメント化された ADACMP レコードヘッダーが存在するかどうかを示します。デフォルトは NO です。（これは、このリリースで ADACMP DECOMPRESS 用に導入された HEADER パラメータとは逆です） ■ LOBDEVICE パラメータは、COMPRESS 機能で生成される LOB ファイルのロードに使用されるデバイスタイプを指定します。 ■ LOBVALUES パラメータは、非圧縮入力データが長い LB 値（253 バイトよりも大きい値）を含むことができるかどうかを示します。LOBVALUES=YES を指定すると（LB フィールドを持つファイルでのみ可能）、ADACMP はロングラージオブジェクト（LB）フィールド値を 2 番目のシーケンシャル出力データセット（DD/AUSB1 JCL コントロールステートメントにより識別）に書き込み、このデータセットは最初の出力データセットからロードされた基本ファイルとともに LOB ファイルにロードされます。 ■ MAXLOGRECLLEN パラメータは、物理的にセグメント化された非圧縮レコードを論理的に圧縮レコードに編成するために ADACMP により使用されるバッファのサイズ（バイト単位）の指定に使用されます。このバッファは、HEADER=YES が指定された場合のみ割り当てられ、使用されます。 ■ MUXEX パラメータは、ファイルの拡張 MU/PE の制限が可能かどうかを示します。このオプションが指定されない場合、指定できる MU フィールドの最大値および PE フィールドの最大値は 191 です。 ■ MUPECOUNT パラメータは、COMPRESS 機能用の入力レコードのバリュースタンプフィールドのサイズを指定します。有効な値は、"1" または "2" です。"1" が指定された場合、入力データで MU または PE 値に先行する各バリュースタンプフィールドは 1 バイトである

ユーティリティ	変更の概要
	<p>必要があり、"191" を超えることはできません。"2" が指定された場合、入力データで MU または PE 値に先行する各バリュウカウンフィールドは 2 バイトである必要があります。MUPEX パラメータが指定されている場合のみ、バリュウカウンは 191 を超えることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SPAN パラメータにより、レコードの圧縮後にその圧縮レコードがデバイスのデータストレージのブロックサイズを超過した場合に、レコードをスパンすることが可能になります。 <p>既存の ADACMP COMPRESS パラメータに次の変更が行われました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ DEVICE パラメータにより生成されるレポートに、ファイルに MUPEX パラメータが設定されたかどうかを表す項目が追加されました。 ■ FNDEF パラメータの構文が変更され、MU および PE オプションのオカレンス数を指定できるようになりました。また、NB および LB フィールドオプションを指定することもできます。 ■ Adabas 8 の ADACMP COMPRESS 機能では、MAXPE191 パラメータはサポートされなくなりました。このパラメータが指定された場合、警告メッセージが発行され、処理が続行されます。 ■ USERISN が、HEADER=YES とともに指定された場合、ADAH ヘッダーの直後に ISN が論理レコードの一部として続きます。 <p>ADACMP DECOMPRESS 処理では、拡張 MU および PE の制限が可能です。また、スバンドレコードを入力とすることも可能です。各非圧縮出力レコードの MU または PE 値に先行するバリュウカウンのサイズは、拡張 MU および拡張 PE がファイルでサポートされているかによって異なります。拡張 MU および拡張 PE がファイルでサポートされている場合、バリュウカウンは 2 バイトになります。拡張 MU および拡張 PE がファイルでサポートされていない場合、バリュウカウンは 1 バイトになります。さらに、次の機能がサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ LB フィールドの圧縮解除がサポートされ、LOBVALUES パラメータが新しく追加されました。このパラメータの値を "NO" に設定すると、ADACMP DECOMPRESS 処理によって 253 バイトまでの LB フィールドだけを出力できます。このパラメータの値を YES に設定すると、ADACMP DECOMPRESS 処理によってすべての LB フィールドを出力できます。 <p>LOBVALUES パラメータに "YES" を指定した場合、データを圧縮解除する LOB ファイルグループの基本ファイルのファイル番号を識別するために INFILE パラメータも指定する必要があります。処理中に ADACMP DECOMPRESS が基本ファイルからレコードを読み取り、圧縮解除すると、参照されているすべての LB フィールド値を LOB ファイルから読み取ります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 新しい HEADER パラメータが ADACMP DECOMPRESS ユーティリティに追加され、ADACMP 非圧縮ロジックがグメント化された ADACMP レコードヘッダー (ADAH および ADAC) を非圧縮出力の一部として生成すべきかどうかを示します。デフォルトは NO です。 ■ 新しい MAXLOGRECLEN パラメータを使用して、非圧縮出力データの物理レコードを 1 つ以上スパンしている論理レコードを ADACMP が編成するのに使用するバッファのサイズ (バ

ユーティリティ	変更の概要
	<p>イト単位) を指定できます。このバッファは、HEADER=YES が指定された場合のみ割り当てられ、使用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ISN パラメータが変更され、HEADER=YES が指定されている場合には、ISN は論理レコードの一部として ADAH ヘッダーの直後に続きます。 <p>従来、ADACMP エラーに生成される DD/FEHL エラーデータセットは、FEHL 物理レコード長を超える拒否レコードを切り捨てていました。バージョン 8 では、拒否されたレコードは切り捨てられずにセグメント化されます。この変更により、DD/FEHL LRECL 設定には、最低 500 バイトが必要となります。</p>
ADADBS	<p>ADADBS ユーティリティに、4つのデータベースサービスが追加され、MU/PE フィールドの数の増加とレコードのスパンがサポートされました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ MUPEX 機能により、ファイルの MU または PE フィールドに許可される最大オカレンス数を指定できます。 ■ RECORDSPANNING 機能は、ファイルでスパンドレコードの使用を有効にします。 ■ RESETPPT 機能は、ASSO データセット上の PPT ブロックをリセットします。 ■ SPANCOUNT 機能は、ファイルに含まれるスパンドレコードの件数をカウントします。 <p>また、ADADBS NEWFIELD 機能の FNDEF 定義を使用すると、FDT にラージオブジェクト (LB) を追加できます。</p>
ADADCK	<p>ADADCK ユーティリティは、次のようにスパンドレコードのヘッダーの妥当性をチェックします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ヘッダーに含まれている ISN が検証されます。ヘッダーには、スパンドレコードチェーン内のプライマリレコードの ISN、チェーン内の直前のスパンドレコード、およびチェーン内の次のスパンドレコードの ISN が含まれています。 ■ スパンドレコードの ID ビットがチェックされます。スパンドレコードのヘッダーには、このレコードがプライマリスパンドレコードか、セカンダリスパンドレコードであるかを示すビットが含まれます。すべてのスパンドレコードでは、これらのビットの 1 つのみをオンにすることができます。 <p>新しい MAXPISN パラメータが導入され、データストレージファイルがスパンされているかどうかのチェックが行われるプライマリ ISN の最大数を設定できるようになりました。デフォルトは 1000 です。</p>
ADAFRM	<p>ADAFRM ユーティリティを使用して、PLOG 全体の再フォーマットをすることなく、PLOG から複数の PLOG ヘッダーを消去できるようになりました。これを行うには、FROMRABN パラメータと同時に NUMBER パラメータも指定する必要があります。また、SIZE パラメータを "1" に指定する必要があります。</p> <p>さらに、このユーティリティは、Adabas 8 で可能なより多くの物理アソシエータおよびデータストレージエクステント (99 個) を扱えるようになりました。</p>
ADAICK	<p>ADAICK DSCHECK 機能を実行すると、プライマリおよびセカンダリ ISN が出力で識別されるようになりました。</p>

ユーティリティ	変更の概要
ADALOD	<p>ADALOD LOAD および UPDATE 機能で、スパンドレコードおよび関連するセカンダリアドレスコンバータをサポートする次の新しいパラメータが導入されました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ AC2RABN パラメータにより、セカンダリアドレスコンバータのスペース割り当てを指定または更新できます。セカンダリアドレスコンバータは、セカンダリスパンドレコードのセカンダリ ISN を、セカンダリレコードが格納されているデータストレージブロックの RABN にマッピングするために使用されます。 ■ オプションの MAXISN2 パラメータにより、ISN 内のセカンダリアドレスコンバータ (AC2) を目的のサイズに設定できます。セカンダリアドレスコンバータは、セカンダリスパンドレコードのセカンダリ ISN を、セカンダリレコードが格納されているデータストレージブロックの RABN にマッピングするために使用されます。 <p>ラジオオブジェクト (LB) フィールドおよび関連する LOB ファイルをサポートできるように、次の新しいパラメータおよびパラメータ値が ADALOD LOAD 機能に導入されました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ オプションの LOBFILE パラメータにより、基本ファイルに関連付けられた LOB ファイルのファイル番号を指定できます。このパラメータは、基本ファイルのロード時に使用されます。 ■ オプションの BASEFILE パラメータにより、LOB ファイルに関連付けられた基本ファイルのファイル番号を指定できます。このパラメータは、LOB ファイルのロード時に使用されます。 ■ 新しいファイルタイプである LOB を FILE パラメータで指定すると、Adabas LOB ファイルを定義済みの FDT とともにロードしているかどうかを示されます。
ADAORD	<p>スパンドレコードをサポートするため、次の 2 つの新しいパラメータが、ADAORD の REORASSO、REORDB、REORFASSO、REORFILE、および STORE 機能に追加されました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ AC2RABN パラメータにより、ファイルの 2 次的なアドレスコンバータエクステントの開始 RABN を指定できます。 ■ オプションの MAXISN2 パラメータにより、ISN 内のセカンダリアドレスコンバータ (AC2) を目的のサイズに設定できます。 <p>セカンダリアドレスコンバータは、セカンダリスパンドレコードのセカンダリ ISN を、セカンダリレコードが格納されているデータストレージブロックの RABN にマッピングするために使用されます。</p>
ADAREP	<p>ADAREP により生成されるレポートに、MUPEX およびスパンドレコードオプションがデータベースに設定されたかどうかを表す項目が追加されました。</p> <p>レポートの [Contents of Database] セクションでは、次の変更が行われました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ この表からパディングファクタが削除され、大きなエクステント値が収まるようになりました。ただし、従来どおりレポートで提供される個々のファイル詳細にもこの値を表示させることができます。これは、LAYOUT=1 が指定されている場合に表示されます。 ■ レポートの作成中に LAYOUT=1 が指定された場合、Adabas 8 でサポートされる大きなエクステント値がファイルごとに表示されます。

ユーティリティ	変更の概要
	<p>■ ファイルが 10 個以上のファイルエクステントをさらに構築することができない場合、ADAREP は、そのファイルの右にアスタリスク (*) マークを付けます。</p> <p>レポートの [File Options] セクションでは、"T" は、2 バイトの MU/PE インデックスがファイルでアクティブであることを示し、"S" は、ファイルでスパンドレコードの使用が有効になっていることを示します。さらに、[Contains LOB Fields] 列は、ファイルが 1 つまたは複数の LB フィールドを含んでいるかどうかを示し（含まれている場合は "L" を表示）、[LOB File] 列（最後の列）は、ファイルが LOB であるかどうかを示します（LOB ファイルの場合は、"L" を表示）。これらの 2 つの LB フィールド列は互いに排他的であり、どちらか一方しかマークされません。</p> <p>レポートの [Physical Layout of the Database] セクションでは、2 次的なアドレスコンバータエクステント（スパンドレコード用）は [Table File Type] 列で [AC2] と表示されます。</p> <p>レポートの [File Information] セクションでは、[Two Byte MU/PE] という新しいフィールドが 2 バイトの MU/PE インデックスがファイルでアクティブかどうかを示します。同じセクションでは、最大、予想される最大、および最小のセカンダリ ISN が表示され、また、新しい [Spanned Rec Supp] フィールドには、スパンドレコードがファイルでアクティブかどうかを示されます。さらに、[Contain LOB Fields] フィールドは、ファイルに 1 つ以上の LB フィールドが含まれているかどうかを示し、[LOB File] フィールドはファイルが LOB ファイルであるかどうかを示します。</p> <p>レポートの [Space Allocation] セクションでは、2 次的なアドレスコンバータエクステント（スパンドレコード用）は [List Type] 列で [AC2] と表示されます。</p> <p>最終的に、Adabas ニュークリアス 75、76 および 77 により、3 個の新しいチェックポイントが書き込まれる可能性があります。</p>
ADASAV	<p>ADASAV RESTONL FMOVE および ADASAV RESTORE FMOVE 機能で、スパンドレコードおよび関連するセカンダリアドレスコンバータをサポートする次の新しいパラメータが導入されました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ AC2RABN パラメータにより、FMOVE により指定されたファイルごとに、セカンダリアドレスコンバータ開始 RABN を指定できます。 ■ MAXISN2 パラメータにより、FMOVE により指定された各ファイルに割り当てられる、セカンダリ ISN の新しい数を指定できます。
ADASEL	<p>新しいパラメータはありませんが、ADASEL は更新され、MU/PE の拡張がサポートされました。特に、ADASEL SELECT IF ステートメントで MU または PE フィールドのインデックスを指定する場合、インデックスは "1" から "65,534" の範囲で指定できるようになりました。以前のリリースの Adabas では、これらのインデックス値の範囲は、"1" から "191" に制限されていました。</p> <p>ADASEL は、その処理中にスパンドレコードを認識しますが、スパンドレコードが含まれたファイルを処理することができません。</p>
ADAULD	<p>新しいパラメータはありませんが、ADAULD が MU/PE 拡張機能、LB フィールド、およびスパンドレコードをサポートするように更新されました。特に、実行中に読み書きされるレ</p>

ユーティリティ	変更の概要
	コードセグメント数を表示する 2 つの新しい統計が ADAULD ユーティリティにより生成されます。

ADARUN パラメータの拡張機能

Adabas 8 に次の ADARUN パラメータが追加されました。

- CLOGLAYOUT パラメータで新しく値 8 が有効になりました。この値は、Adabas 8 コマンドのロングフォーマットに対応しています。詳細は、「CLOGLAYOUT コマンドログレイアウト」を参照してください。

この新しいパラメータをサポートするために、LORECX と呼ばれる新しい DSECT が用意され、これによって CLOGLAYOUT=8 レコードレイアウトが記述されます。詳細については、「コマンドログフォーマット」を参照してください。

- Adabas 8 ABD、マルチフェッチバッファ、およびユーザーバッファのログ処理をサポートするために、3 つの新しい LOGGING パラメータが追加されました。これらのサブパラメータは、LOGABDX、LOGMB、および LOGUB です。
- CLOGBMAX パラメータが新しく追加されました。このパラメータを使用すると、ログバッファの最大サイズを指定することができます。バッファが大きくなると、サイズが CLOGBMAX パラメータの設定を超えた位置からログバッファが切り捨てられます。CLOGBMAX 設定は、CLOGLAYOUT=5 および CLOGLAYOUT=8 の両方の ADARUN LOGGING パラメータ指定に適用されます。
- CLOGMAX パラメータが新しく追加されました。このパラメータを使用すると、Adabas コマンドで使用されるすべてのログバッファの最大サイズを指定できます。Adabas コマンドのログ記録バッファの合計サイズが CLOGMAX パラメータの値に到達すると、制限を超えたバッファは切り捨てられ、以降のバッファは削除されます。CLOGMAX 設定は、CLOGLAYOUT=5 および CLOGLAYOUT=8 の両方の ADARUN LOGGING パラメータ指定に適用されます。
- 以前のバージョンの Adabas では、データベース I/O の EXCP または EXCPVR の使用と、ロードライブラリの APF 認可は相互に関連します。APF 認可なしで実行している場合は常に EXCP が使用され、APF 認可ありで実行している場合には EXCPVR が常に使用されます。APF 認可を実行している場合に EXCP を使用するには、特別な A\$-zap または AY-zap の適用が必要です。

このリリースでは、z/OS 環境で使用できる新しい ADARUN パラメータ、EXCPVR が導入されています。このパラメータを使用すると、APF 認可の実行時に EXCP または EXCPVR のどちらを使用するかを指定できます。このパラメータの詳細については、「EXCPVR : EXCP または EXCPVR の使用の制御」を参照してください。

zap はもう必要ないため、古い A\$-zap や AY-zap に対する更新は提供されません。

- LNKGNAME パラメータが新しく追加されました。このパラメータを使用すると、Adabas 8 バッチ/TSO リンクルーチンでデフォルト情報を取得して、リンクした出口を呼び出すために使用するリンクグローバルテーブルの名前を指定できます。
- PROGRAM パラメータで値 RENTUSER が新しく有効になりました。この値を使用すると、リエントラント Adabas バッチ/TSO リンクルーチンを使用してユーザープログラムを実行するように指定できます。
- BS2000 システムで、Adabas Review や Adabas Parallel Services などの製品のサブタスクに共通メモリプールのサイズ (バイト) を指定できる新しいパラメータ SUBMPSZ が追加されました。

ADARUN パラメータの詳細については、「*Adabas* の初期化 (ADARUN ステートメント)」を参照してください。

コマンドログのタイムスタンプの変更点

CLOGLAYOUT=8 を使用して作成された Adabas 8 コマンドログのタイムスタンプは、マシンタイム (GMT) で格納されます。一方、CLOGLAYOUT=5 タイムスタンプは常にローカルタイムで格納されます。LORECX レコードレイアウトには、CLOG レコードが書き込まれた時点のマシンタイムとローカルタイムの差が格納された時間差フィールドが含まれます。このフィールドにより、コマンドログレコードのローカルタイムの計算が可能になります。タイムスタンプ形式の違いにより、異なる CLOGLAYOUT 設定を用いて作成されたコマンドログを混在させたり、マージしたりすることはお勧めしません (実際にクラスタ、または Parallel Services 環境の Adabas では許可されていません)。詳細は、「CLOGLAYOUT コマンドログレイアウト」を参照してください。

PRILOG 出力プログラムの更新

PRILOG 出力プログラムのパラメータが変更されました。

- CLOGLAYOUT パラメータで値 8 が新しく有効になりました。この値は、ADARUN CLOGLAYOUT=8 で作成されるコマンドログに対応しています。
- 新しい有効値 (ACBX、MB、PB、および VERB) が FIELDS パラメータに追加されました。これらの値は、Adabas 8 の新機能および拡張機能に対応しています。
- 新しいパラメータ、DIMENSIONS が追加されました。このパラメータにより、出力形式を指定できます。
- PRILOG 出力を制限できる新しいコマンド選択パラメータが追加されました。

PRILOG 出力プログラムの詳細については、「*PRILOG* (コマンドログの出力)」を参照してください。

ユーザー出口 11 およびサンプル出口 UEX11UX1

Adabas 8 では、新しいユーザー出口 11 とサンプル出口 UEX11UX1 がサポートされています。既存のユーザー出口 1 の前にサンプルユーザー出口 UEX11UX1 を挿入すると、Adabas 8 でユーザー出口 1 をユーザー出口 11 として使用することができます。このサンプルユーザー出口は、ダイレクトコールで ACBX ダイレクトコールインターフェイスではなく、ACB ダイレクトコールインターフェイスが使用される場合にのみ使用できます。詳細については、「ユーザー出口 1 (一般処理)」を参照してください。

新しいユーザー出口 11 では、ユーザー出口 1 のすべての面がサポートされているだけでなく、ACB タイプと ACBX タイプの両方のダイレクトコールに対応しています。唯一の違いは、ユーザー出口 11 が Adabas のオリジナルの構造そのものではなく、Adabas 構造のコピーを処理することです。ユーザー出口 11 の詳細については、「ユーザー出口 1 (一般処理)」を参照してください。

ロング英数字 (LA) フィールドの変更点

Adabas 8 では、ロング英数字 (LA) フィールドが更新され、ラージオブジェクト (LB) フィールドに対する多数のサポートが有効になりました。

今回のリリースでは、ロング英数字 (LA) フィールドで次の更新が行われました。

- LA フィールドは、フォーマットバッファ内で 253 個を超える固定フィールド長を指定できるようになりました。詳細については、「フォーマットバッファの変更点」を参照してください。
- 新しいアスタリスク (*) フィールド長指定が、フォーマットバッファ内の LA フィールドでサポートされます。アスタリスクフィールドの長さ指定の詳細については、「アスタリスク (*) を使った長さ表記」を参照してください。
- 長さインジケータと呼ばれる新しいフォーマットバッファインジケータ (L) を使用して、LA または LB フィールド値の実際の長さを取得または指定できるようになりました。詳細は、「長さインジケータ (L)」を参照してください。
- マルチプルバリュー LA フィールドおよびピリオディックグループ内の LA フィールドに基本フィールドを指定する場合は、オカレンスインデックスまたは "1-N" インデックスが必要です。特定のインデックスまたはインデックス範囲を使用する必要があります。例えば、L2 が MU オプション付きの LA フィールドの場合、次のフォーマットバッファ指定は無効です。

```
FB= 'L21-N.'
```

```
FB= 'L2.'
```

ただし、L2 フィールドの 1 番目から 3 番目の値を要求している次のフォーマットバッファ指定は有効です。

```
FB= 'L21-3.'
```

I/O の最適化

z/OS 環境では、システムリソースの使用を最適化するために、Adabas 8 の I/O ルーチンにさまざまな拡張が行われました。このリリースの Adabas では、z/OS でサポートされている場合は必ず、I/O 要求に Format-1 CCW が使用されます (z/OS には EXCPVR を持つすべてのリリースの z/OS および EXCP を持つ z/OS 1.6 以降を含む)。これにより、I/O 要求が 16M 境界を超えるストレージフレームを占有できるようになり、16M 境界よりも下のストレージに対する制約を低減することができます。


Adabas I/O コントロールブロックは、できる限り、16M 境界よりも上に移動されています。

また、Adabas 8.1.1 で各 I/O 要求中に固定されるストレージ量が最小になったため、EXCPVR を使用する各 Adabas ニュークリアスまたはユーティリティのページ固定要件が少なくなりました。さらに、Adabas 7.4.4 で導入された ADARUN PGFIX パラメータを使用すると、EXCPVR が使用されている場合にどのようにページ固定を実行するかを制御できます。このパラメータの使用の詳細については、「PGFIX：EXCPVR ページ固定制御」を参照してください。

インストールの更新

Adabas 8 ではデフォルト値として TP モニタルーチンおよびバッチモニタルーチンが完全にリンクされていますが、TP モニタおよびバッチモニタのインストールを調整するために、新しいリンクグローバルモジュールおよび関連する LGBLSET マクロも導入されています。このモジュールとマクロを使用すると、Adabas 8 のソースを編集することなく、リンクルーチンコンポーネントのデフォルト値を設定することができるため、TP モニタおよびバッチモニタのインストールを大幅に簡略化できます。さらに、Adabas 8 リンクルーチンをサポートするためにさまざまな新しいモジュールが追加されています。

Adabas 8 では、既存の Adabas 7 アプリケーションが Adabas 8 でも機能するように、従来の Adabas 7 TP モジュールおよびバッチモジュールが提供されています (名前は変更されました)。これらのモジュールは、以前のリリースと同様に調整できます。

 **Note:** Adabas 8 CICS TP モニタはすべて、タスク関連ユーザー出口 (TRUE) を使用します。実行できる TRUE 以外のインストールは、Adabas 7 リリースのインストールだけです。

TP モニタおよびバッチモニタのインストールの詳細については、「TP モニタを使用する場合の Adabas のインストール」を参照してください。

新しいライセンスコンポーネント

ライセンスコンポーネントが新しく提供されています。このコンポーネントは、インストール済みのソフトウェアに割り当てられたライセンスキーと CPUID を照合して、これらが一致しない場合に警告メッセージを発します。このライセンスコンポーネントが新しく導入されたため、ニュークリアスの起動を変更する必要があります。

Adabas のライセンスの詳細については「Adabas のライセンス」を、製品ライセンスファイルのインストール方法については、該当するインストール手順を参照してください。

BS2000 の拡張機能

Adabas 8 における BS2000 のデフォルトのデバイスタイプは 2002 です。このデバイスタイプは NK4 ディスクと互換性がありますが、以前のデフォルトのデバイスタイプ、2000 は互換性がありません。ライセンスファイルは、ニュークリアス BLSLIB チェーンにあるライブラリに組み込まれています。

また、BS2000 には ADARUN パラメータ SUBMPSZ が新しく追加されました。このパラメータを使用すると、Adabas Review や Adabas Parallel Services などの製品のサブタスクに共通メモリプールのサイズ (バイト) を指定できます。

拡張 MU/PE フィールドのハイパー出口のサポート

このリリースでは、ハイパーディスクリプタの指定で拡張 MU/PE フィールドをサポートするために、ハイパー出口ロジックが更新されています。

さらに、Adabas 8 にはハイパー出口スタブが含まれており、既存のハイパー出口は Adabas 8 パラメータリストを変更せずに使用することができます。ハイパー出口スタブは、新しい Adabas 8 パラメータエリアを使用するために既存のハイパー出口をすぐに更新したくないお客様に向けた一時的な解決方法として用意されています。Adabas 8 におけるすべてのハイパー出口のサポートについては、「ハイパーディスクリプタ出口 01 - 31」を参照してください。

5 廃止された機能

Adabas バージョン 8 では、次の機能が廃止されています。

- 下の表に示した Adabas 7 リンクルーチンモジュールは、Adabas 8.1.3 では提供されません。



Note: 現時点では、Adabas 8 でこれらのモジュールを使用することは可能です。これらのモジュールを旧バージョンの Adabas 8 で使用していた場合は引き続き使用できますが、できるだけ早く Adabas 8 リンクルーチンに移行することをお勧めします。

プラットフォーム	リンクルーチンモジュール	説明
IMS/TM	ADALNI7	メッセージ処理プログラム (MPP) 用のリンクルーチン
CICS	LNKOLSC	Adabas コマンドレベルリンクルーチン依存部分
	LNKOLM	Adabas コマンドレベルリンクルーチン非依存部分
	LNKTRUE	Adabas タスク関連ユーザー出口
	LNKENAB	Adabas PLT 起動プログラム
	DISPGWA	Adabas グローバルワークエリア (GWA) 用の表示プログラム
Com-Plete	ADALCO7	基本モジュール
バッチ/TSO	ADALNK7	基本モジュール
	ADALNKR7	リエントラントモジュール

- ADACMP COMPRESS の MAXPE191 パラメータはサポートされなくなりました。このパラメータが指定された場合、警告メッセージが発行され、処理が継続されます。ADACMP COMPRESS の変更点の詳細については、ADACMP COMPRESS の変更点に関する説明を参照してください。
- バージョン 8 より前のバージョンでは、VSAM RRDS または線形データセットで Adabas コンテナを定義できましたが、現在 VSAM コンテナのサポートは利用できなくなりました。

- 従来のリリースのリンク コンポーネントとは異なり、Adabas 8 の TP リンクコンポーネント およびバッチリンクコンポーネントは、ソースコードでは提供されていません。これらのコンポーネントはロードモジュール形式でのみ提供され、インストールおよびカスタマイズの手順が新しくなっています。
- IBMは、最新リリースのVSEではCICSマクロレベルのプログラミングを推奨していません。このため、現在 Software AG は、VSE Adabas または WAL サブライブラリ内で CICS マクロレベルリンクルーチン ADALNC を提供していません。CICS/VSE 2.3 以前のバージョンをご利用のユーザーは、Adabas 7.1.3 または WAL 7.1.3 サブライブラリから ADALNC をコピーして、このコピーを CICS/VSE 2.3 以前のバージョンで実行してください。
- BS2000 環境では、Adabas 8.1 の ADALNK 用のソースモジュールは提供されていません。ただし、ADALNK、ADAL2P、および LNKUES のコンポーネントで構成される新しい ADALNK モジュールは、変更された ADALNK コンポーネントのバインドに使用できます。
- ADARUN CLOGLAYOUT=4 設定は実行されません。また設定の 4 はサポートされません。代わりに CLOGLAYOUT=5 をお使いください。
- ユーザー出口 1 のサポートは廃止されました。代わりにユーザー出口 11 することをお勧めします。移行を容易にするため、サンプルユーザー出口 UEX11UX1 を既存のユーザー出口 1 の前に挿入して、ユーザー出口 11 として呼び出すようにすることができます。

6 制限および制約事項

Adabas 8 には、次の制限および制約事項があります。今後のリリースでは、これらの制限を解決する拡張機能が検討される可能性があります。

1. LGBLSET マクロの LUIDX パラメータおよび LUIXNAM パラメータ（Adabas リンクルーチンのデフォルトのインストール値を設定するために使用）は、インストールのサンプルメンバに表示される場合でも、現在サポートされていません。これらのパラメータに関するドキュメントは削除されています。
2. このリリースのラージオブジェクト（LB）フィールドには、次の制約および制限事項が適用されます。
 - Adabas 8 では LB フィールドがサポートされていますが、このリリースで可能なのは LB フィールド全体を格納および取得することだけです。複数のコールで LB フィールドを左から右へ読み書きする機能は、Adabas の今後のバージョンを対象として検討されています。
 - このリリースでは、コードページ間の LB フィールド値の文字変換はサポートされていません。この機能は、今後のリリースで検討される可能性があります。
 - 一部のユーティリティパラメータは、LB フィールドを含むファイルではサポートされていません。詳細については、ユーティリティに関するドキュメントおよびこの chapter で後述するユーティリティの制限および制約事項を参照してください。
 - 現在、ラージオブジェクト（LB）フィールドはフォーマット A でしか定義できません。
3. 新しいフォーマットバッファの長さインジケータは、LA フィールドおよび LB フィールドでのみサポートされています。Adabas の今後のバージョンでは、他のフィールドにおける長さインジケータの指定も検討される予定です。フォーマットバッファの長さインジケータの詳細については、「長さインジケータ (L)」を参照してください。
4. このリリースで Adabas バッファ記述 (ABD) を指定するときは、Adabas に送信するバイト数 (ABDXSEND フィールド) に、最大バッファサイズ (ABDXSIZE フィールド) と同じ値を指定する必要があります。
5. ACBX インターフェイスのダイレクトコールではプリフェッチ機能はサポートされていないため、代わりにマルチフェッチ機能を使用する必要があります。ただし、ACB インターフェ

イスダイレクトコール用のプリフェッチ機能はサポートされています。したがって、アプリケーションに ACB インターフェイスダイレクトコールを使用している場合、これらのコールのみにプリフェッチ機能は、引き続き使用することができます。

6. このリリースでは、システムファイルは、スパンドレコードまたは拡張 MU および PE フィールドカウントをサポートしていません。
7. このリリースでは、NB オプションで定義したフィールドを NU または NC オプションでも定義する必要があります。
8. このリリースのスパンドレコードには、次の制約および制限事項が適用されます。
 - 現在、ADACDC ユーティリティでは、スパンドレコードはサポートしていません。
 - ADAULD ユーティリティでは、ADAULDSAVETAPE 実行時にスパンドレコードはサポートしていません。
 - ADAM ファイルでは、スパンドレコードはサポートしていません。
 - このリリースのシステムファイルでは、スパンドレコードはサポートしていません。
 - スパンドレコードを構成するレコード数は制限されています。Adabas ニュークリアスは、スパンドレコード内に最大 5 個の物理レコード（1 個のプライマリレコードと 4 個のセカンダリレコード）を許可しています。さらに容量が必要な場合は、ファイルのデータストレージをブロックサイズの大きな別のデバイスタイプに再配置してください。

Adabas 8 のスパンドレコードの詳細については、「スパンドレコードのサポート」を参照してください。

9. このリリースの Adabas Review Pulse レポートでは、ADARUN CLOGLAYOUT=8 はサポートしていません。
10. 次の表に、Adabas 8 ユーティリティの制約および制限事項を示します。

ユーティリティ	制約または制限事項
ADACDC	このリリースでは、ADACDC はスパンドレコードを処理できません。スパンドレコードが更新されると、変更されたレコードだけが PLOG および WORK データセットに書き込まれます。ADACDC は、外部形式でレコードの変更を示すため、最初から論理レコードを圧縮解除する必要があります。ただし、先頭部分が見つからない場合、圧縮解除は機能しません。
ADACMP	このリリースでは、ADACMP COMPRESS または ADACMP DECOMPRESS の FORMAT パラメータに LB フィールドを指定することはできません。
ADACNV	ADACNV CONVERT を使用して、データベースを Adabas 7.1 から Adabas 8 に直接変換することはできません。これを行うには、最初にデータベースを Adabas 7.2 または 7.4 に変換し、次に Adabas 8 に変換する必要があります。同様に、REVERT を使用して、データベースを Adabas 8 から Adabas 7.1 に直接変換することもできません。データベースをまず Adabas 7.4 に変換し、7.4 から 7.1 に変換する必要があります。 データベースで Adabas 8 の次の拡張機能が使用されている場合、ADACNV を使用してデータベースを Adabas 8 よりも前のバージョンに変換することはできません。

ユーティリティ	制約または制限事項
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 5 個を超える ASSO、DATA、または DSST エクステンツ ■ 5 個を超えるファイルエクステンツ ■ スパンドレコードの使用が可能なファイル ■ 191 を超える MU および PE オカレンスが可能なファイル ■ LB フィールドが使用されているファイル ■ NB (空白圧縮なし) オプションが設定されたフィールドを持つファイル ■ 2 バイトファイル番号を持つシステムファイル <p>下位変換 (逆変換) を実行する場合は、まず、このような新機能が使用されたファイルを Adabas データベースから削除する必要があります。</p> <p>Adabas 8 で提供されている次のその他の新機能を使用しても、Adabas 7.4 への下位変換が可能です。ただし、新機能は Adabas 7.4 では使用できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ACBX インターフェイス経由 (長いバッファ、セグメント化されたバッファを使用する場合など) で発行された Adabas コマンド ■ 新しいフォーマットバッファ機能 (長さインジケータなど) を使用したコマンド <p>注意: ロードされないが、フィールド定義テーブル (FDT) ブロックに FDT が格納されているファイルがデータベース内に存在する可能性があります。データベースのバージョン 8 への変換中に、ADACNV がこのような FDT を検出した場合、後処理の一部としてこれらの FDT は削除されます。</p>
ADALOD	<p>ロードするファイルが LOB ファイルであるか、スパンドレコード、拡張 MU フィールドまたは PE フィールドを含む場合、ADALOD LOAD 実行時に MIXDSDEV パラメータはサポートされません。スパンドレコードは、データストレージのブロックサイズに基づいています。MIXDSDEV パラメータによってデバイスタイプを組み合わせると、スパンドレコードのレコード長が変更される可能性があります、これは許可されていません。</p> <p>ADALOD UPDATE 機能で DDISN または DELISN パラメータを使用して LOB ファイルのレコードを削除することはできません。ただし、削除対象のレコードに、LOB ファイルに格納された 253 バイトを超える LOB 値への参照がない場合、LOB グループの基本ファイルにこれらのパラメータを使用することはできます。このような参照がある場合に要求を行うと、ADALOD はエラーで終了します。</p>
ADAULD	<p>このリリースでは、アンロードするファイルにスパンドレコードが含まれている場合、SAVETAPE によるアンロードは実行できません。</p>

7 Adabas データセットの互換性

■ ファイルのインポート	38
■ セーブデータセット	38
■ アンロードデータセット	39
■ ADAORD DD/FILEA データセット	39
■ シーケンシャルプロテクションログ	39

通常、Adabas ユーティリティは、同じバージョンのユーティリティによって出力データセットとして作成されたシーケンシャル入力データセットを受け入れます。また、Adabas 8 のユーティリティは、Adabas 8 より前のバージョンのユーティリティで作成された入力データセットも受け入れます。ただし、Adabas 8 より前のバージョンのユーティリティでは、通常、Adabas 8 ユーティリティで作成された入力データセットは操作できません。

このchapterでは、次のトピックについて説明します。

ファイルのインポート

新しいバージョンの Adabas でのみサポートされている機能を使用されていない限り、ファイルは旧バージョンの Adabas にインポート（ロード、格納、または復元）できます。

セーブデータセット

一般に、データベース全体の復元は、同一の Adabas リリースを使用してセーブデータセットを作成した場合にのみ可能です。個々のファイルの復元は、同一または後続の Adabas リリースを使用してセーブデータセットを作成した場合に可能です。

Adabas 8 の ADASAV ユーティリティを使用すると、旧バージョンの Adabas（Adabas 7 など）の ADASAV ユーティリティで作成したデータベースセーブデータセットまたはファイルセーブデータセットから、Adabas 8 データベースにファイルを復元することができます。同様に、Adabas 8 の ADAREP または ADAULD ユーティリティを使用すると、旧バージョンの Adabas の ADASAV ユーティリティで作成したデータベースセーブデータセットまたはファイルセーブデータセットから、レポートを出力したり、ファイルをアンロードしたりすることができます。ただし、Adabas 8 データベースセーブデータセットまたはファイルセーブデータセットから Adabas 7.4 を実行するデータベースにファイルを復元できるのは、次のうちの適切な ZAP を Adabas 7 に適用している場合だけです。

- 7.4.4 インストールの場合は ZAP AU744032 を適用
- 7.4.3 インストールの場合は ZAP AU743099 を適用
- 7.4.2 インストールの場合は ZAP AU742186 を適用

Adabas 8 より前のバージョンの ADAREP または ADAULD ユーティリティを使用して、Adabas 8 の ADASAV ユーティリティで作成したセーブデータセットからレポートを出力したり、ファイルをアンロードしたりすることはできません。Adabas Delta Save を使用している場合は、バージョンの異なる ADASAV ユーティリティで作成されたデルタセーブデータセットをマージすることはできません。データベースをバージョン 8 に変換した後、次のセーブ操作をフルセーブとして実行してください。

アンロードデータセット

Adabas 8 の ADALOD ユーティリティを使用すると、旧バージョンの Adabas の ADAULD または ADACMP ユーティリティを使用して作成したアンロードデータセットからファイルをロードすることができます。Adabas 7 の ADALOD または ADACMP ユーティリティを使用して、Adabas 8 の ADAULD または ADACMP ユーティリティで作成されたアンロードデータセットからファイルをロードまたは圧縮解除することもできます。ただし、これは、次のうちの適切な ZAP を Adabas 7 に適用している場合だけです。

- 7.4.4 インストールの場合は ZAP AU744033 を適用
- 7.4.3 インストールの場合は ZAP AU743100 を適用
- 7.4.2 インストールの場合は ZAP AU742187 を適用

ADAORD DD/FILEA データセット

ADAORD STORE を使用すると、Adabas 8 以前のバージョンのデータベースやファイルを再構築して、Adabas 8 データベースに格納できます。ただし、再構築した Adabas 8 データベース出力、または Adabas 7 などの以前のバージョンで実行中のデータベースに含まれるファイルは、格納できません。

シーケンシャルプロテクションログ

Adabas 8 で REGENERATE または BACKOUT 機能に使用するシーケンシャルプロテクションログ (PLOG) は、Adabas 8 で作成されている必要があります。Adabas 8 より前のバージョンの REGENERATE または BACKOUT 機能では、Adabas 8 で作成したシーケンシャル PLOG は使用できません。

Adabas 8 の ADASEL ユーティリティを実行して、Adabas 8 より前のバージョンの Adabas で作成したシーケンシャル PLOG からデータを選択することはできません。また、旧バージョンの Adabas (Adabas 7 など) の ADASEL ユーティリティを実行して、Adabas 8 で作成した PLOG からデータを選択することもできません。

Adabas 8 の ADARESCOPY ユーティリティを実行して、Adabas 8 より前のバージョンの Adabas で作成したシーケンシャル PLOG からデータをコピーすることはできません。また、旧バージョンの Adabas (Adabas 7 など) の ADARESCOPY ユーティリティを実行して、Adabas 8 で作成した PLOG からデータをコピーすることもできません。

8 ZAP データセット

配布されたソースライブラリには、メンバ ZAPOPT が含まれています。ZAPOPT は、Adabas のさまざまな機能をアクティブ化または非アクティブ化する ZAP をリストします。ZAPOPT メンバは、各 SM レベル単位で配布されます。



Important: 提供されたすべての Adabas 8 のメンテナンスを提供時の状態のまま適用し、Adabas 8 パッチレベルライブラリ (L00n) を提供時の状態のまま連結したことを確認してください。これにより、Adabas 8 のコードは最新に保たれ、すべての Adabas 8 の機能の拡張とメンテナンスがサポートされます。

9 Software AG 製品の互換性

次の表で、Adabas 8 と他の Adabas 製品（以前のリリースの Adabas 自体も含む）との互換性について説明します。このリストにお使いのリリースが含まれていない場合、インストールされているソフトウェアのアップグレードが必要な場合があります。

製品	互換バージョンレベルと注意点
Adabas (ADA)	<p>Adabas 8 データベースの操作には、Adabas 8 の SVC、ニュークリアス、およびユーティリティを使用する必要があります。Adabas 7.4 データベースを操作する場合は、Adabas8のユーティリティとニュークリアスは使用できませんが、Adabas 7.4 データベースには Adabas 8 の SVC も使用できます。</p> <p>Adabas リンク (Adalink) ルーチンは、異なるバージョン間でも使用できます。例えば、Adabas 8 リンクルーチンを使用して、Adabas7データベースにコールを発行することができます。また、新しい ACBX ダイレクトコールインターフェイスを使用していない場合は、Adabas7.4リンクルーチンを使用して、Adabas8データベースにコールを発行することもできます。Software AG では、Adabas ダイレクトコールを発行するすべてのプログラムに Adabas 8 リンクルーチンを使用することをお勧めします。</p> <p>VSE システムでは、必要に応じて次の ZAP を適用して、Adabas 8 SVC が Adabas 7.4 または Adabas 7.1 データベースと通信できるようにする必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none">■ AD744008■ AD743018■ AD713039
Adabas Bridge for DL/I (ADL)	バージョン 2.2.2 は Adabas 8 をサポートしています。
Adabas Bridge for VSAM (AVB)	バージョン 5.1.1 リリースは Adabas 8 データベースをサポートしますが、Adabas 8 で利用可能な拡張機能（スパンドレコード、制限の緩和、ラージオブジェクトフィールドなど）は使用できません。

製品	互換バージョンレベルと注意点
Adabas Caching Facility (ACF)	<p>バージョン 8.1 以降のバージョンは、すべての Adabas 8 データベースおよび拡張機能を完全にサポートします。</p> <p>Adabas Caching Facility 8.1 は Adabas 8 とともに実行する必要があります。同様に、Adabas Caching Facility 7.4 は Adabas 7.4 とともに実行する必要があります。Adabas Caching Facility 7.4 は Adabas 8 とともに実行できません。</p>
Adabas CICS Interface (ACI)	<p>バージョン 7.4 リリースは Adabas 8 データベースをサポートしますが、Adabas 8 で利用可能な拡張機能（スパンドレコード、制限の緩和、ラージオブジェクトフィールドなど）は使用できません。</p> <p>バージョン 8.1 以降のバージョンは、すべての Adabas 8 データベースおよび拡張機能を完全にサポートします。</p>
Adabas Cluster Services (ALS)	<p>バージョン 8.1.3 には、Adabas 8.1.3 以降が必要です。</p> <p>バージョン 7.4.2 には、Adabas 8.1.2 以前が必要です。Adabas 8.1.2 とともに実行すると、Adabas 8.1 の新機能を完全にサポートします。</p>
Adabas Delta Save (ADE)	<p>バージョン 8.1 以降のバージョンは、すべての Adabas 8 データベースおよび拡張機能を完全にサポートします。</p> <p>Adabas Delta Save 8.1 は Adabas 8 とともに実行する必要があります。同様に、Adabas Delta Save 7.4 は Adabas 7.4 とともに実行する必要があります。Adabas Delta Save 7.4 は Adabas 8 とともに実行できません。</p>
Adabas Fastpath (AFP)	<p>バージョン 8.1 以降のバージョンは、すべての Adabas 8 データベースおよび拡張機能を完全にサポートします。</p> <p>さらに、バージョン 7.4 の Adabas Fastpath では、オプションの修正版が順次提供され、Adabas 8 の拡張機能（スパンドレコード、制限の緩和、ラージオブジェクトフィールドなど）が使用されていない場合に、Adabas 8 データベースとともに動作するようになります。</p>
Adabas IMS Interface (AII)	<p>バージョン 7.4 リリースは Adabas 8 データベースをサポートしますが、Adabas 8 で利用可能な拡張機能（スパンドレコード、制限の緩和、ラージオブジェクトフィールドなど）は使用できません。</p> <p>バージョン 8.1 以降のバージョンは、すべての Adabas 8 データベースおよび拡張機能を完全にサポートします。</p>
Adabas Manager (AMA)	<p>バージョン 7.4 リリースは、Adabas 7 データベースのみをサポートしています。今後のリリースでは、Adabas 8 データベースおよび拡張機能を完全にサポートする予定です。</p>
Adabas Native SQL (SQL)	<p>バージョン 2.3.1 は Adabas 8 データベースをサポートしますが、Adabas 8 で利用可能な拡張機能（スパンドレコード、制限の緩和、ラージオブジェクトフィールドなど）は使用できません。今後、Adabas 8 を完全にサポートする予定です。</p>
Adabas Online System (AOS)	<p>バージョン 8.1 以降のバージョンは、すべての Adabas 8 データベースおよび拡張機能を完全にサポートします。Adabas Online System バージョン 8 を使用して Adabas 7.4 データベースにアクセスすることはできますが、Adabas Online System 7.4 を使用して Adabas 8 データベースにアクセスすることはできません。</p>

製品	互換バージョンレベルと注意点
Adabas Parallel Services (ASM)	バージョン 8.1.3 には、Adabas 8.1.3 以降が必要です。 バージョン 7.5.1 には、Adabas 8.1.2 以前が必要です。Adabas 8.1.2 とともに実行すると、Adabas 8.1 の新機能を完全にサポートします。
Adabas Review (REV)	バージョン 4.4 以降のバージョンは、すべての Adabas 8 データベースおよび拡張機能を完全にサポートします。 ZAP RD432090 が適用されている場合、バージョン 4.3.2 リリースは Adabas 8 データベースをサポートしますが、Adabas 8 で利用可能な拡張機能（スパンドレコード、制限の緩和、ラージオブジェクトフィールドなど）は使用できません。今後、Adabas 8 を完全にサポートする予定です。
Adabas SAF Security z/OS (AAF)	バージョン 8.1 以降のバージョンは、すべての Adabas 8 データベースおよび拡張機能を完全にサポートします。 さらに、バージョン 7.4 の Adabas SAF Security では、オプションの修正版が順次提供され、Adabas 8 の拡張機能（スパンドレコード、制限の緩和、ラージオブジェクトフィールドなど）が使用されていない場合に、Adabas 8 データベースとともに動作するようになります。
Adabas Statistics Facility (ASF)	バージョン 7.1 は Adabas 8 データベースをサポートしていません。
Adabas SQL Gateway (ACE)	バージョン 6.5.1 は Adabas 8 データベースをサポートしますが、Adabas 8 で利用可能な拡張機能（スパンドレコード、制限の緩和、ラージオブジェクトフィールドなど）は使用できません。今後、Adabas 8 データベースおよび拡張機能を完全にサポートする予定です。
Adabas SQL Server (ESQ)	バージョン 1.4.3 は Adabas 8 データベースをサポートしますが、Adabas 8 で利用可能な拡張機能（スパンドレコード、制限の緩和、ラージオブジェクトフィールドなど）は使用できません。
Adabas System Coordinator (COR)	バージョン 8.1 以降のバージョンは、すべての Adabas 8 データベースおよび拡張機能を完全にサポートします。 さらに、バージョン 7.4 の Adabas System Coordinator では、オプションの修正版が順次提供され、Adabas 8 の拡張機能（スパンドレコード、制限の緩和、ラージオブジェクトフィールドなど）が使用されていない場合に、Adabas 8 データベースとともに動作するようになります。
Adabas Text Retrieval (TRS)	バージョン 2.1.4 は、ZAP TR21454 を適用して Adabas Text Retrieval 2.1.4 ハイパー出口 TRSHX12 がバージョン 8 インターフェイスで有効になっている場合、Adabas 8.1.3 に使用できます。この場合、このハイパー出口は、Adabas バージョン 8.1 のみ動作します。Adabas Text Retrieval 2.1.4 を再度 Adabas バージョン 7 で実行する場合は、ZAP を取り消すか、ZAP TR21454 が適用されていないハイパー出口のコピーを使用する必要があります。TR21454 を使用する場合は、追加の Adabas Text Retrieval 修正ファイル、TR21420、TR21421、TR21422、TR21423 および TR21424 を必須の ZAP として適用する必要があります。これらの ZAP は ServLine 24 にあります。 Adabas 8.1.3 ハイパー出口スタブを Adabas Text Retrieval とともに使用する必要はありません。

製品	互換バージョンレベルと注意点
Adabas Transaction Manager (ATM)	<p>バージョン 8.1 以降のバージョンは、すべての Adabas 8 データベースおよび拡張機能を完全にサポートします。</p> <p>さらに、バージョン 7.5 の Adabas Transaction Manager では、オプションの修正版とともに順次提供され、Adabas 8 の拡張機能（スパンドレコード、制限の緩和、ラージオブジェクトフィールドなど）は使用できませんが、Adabas 8 データベースとともに使用できるようになります。</p>
Adabas Vista (AVI)	<p>バージョン 8.1 以降のバージョンは、すべての Adabas 8 データベースおよび拡張機能を完全にサポートします。</p> <p>さらに、バージョン 7.4 の Adabas Vista では、オプションの修正版が順次提供され、Adabas 8 の拡張機能（スパンドレコード、制限の緩和、ラージオブジェクトフィールドなど）が使用されていない場合に、Adabas 8 データベースとともに動作するようになります。</p>
Entire Net-Work (WCP)	<p>バージョン 6.1 以降のバージョンは、Adabas 8 データベースと拡張機能、および ACBX インターフェイスのダイレクトコールを完全にサポートします。</p> <p>バージョン 5.9 リリースは Adabas 8 データベースをサポートしますが、Adabas 8 で利用可能な拡張機能（スパンドレコード、制限の緩和、ラージオブジェクトフィールドなど）は使用できません。また、バージョン 5.9 リリースでは、ACB インターフェイスダイレクトコールはサポートされていますが、ACBX インターフェイスダイレクトコールはサポートされていません。</p>
Entire System Server	<p>バージョン 3.3 は、ZAPXC61052 および XC61053 を適用した場合、Adabas 8 データベースおよび拡張機能を完全にサポートします。</p>
Event Replicator for Adabas (ARK)	<p>バージョン 3.1 以降のバージョンは、Adabas 8 データベースおよび拡張機能を完全にサポートします。</p>
Natural (NAT)	<p>バージョン 4.2 は、Entire System Server 3.3 を使用した場合、Adabas 8 データベースおよび拡張機能を完全にサポートします。</p> <p>バージョン 4.1 は、ZAPNA64099 を適用した場合（z/OS システムのみ）、Adabas 8 データベースをサポートしますが、Adabas 8 で利用可能な拡張機能（スパンドレコード、制限の緩和、ラージオブジェクトフィールドなど）は使用できません。</p>
Predict	<p>バージョン 4.5 は、Adabas 8 データベースおよび拡張機能を完全にサポートします。</p> <p>バージョン 4.4 は Adabas 8 データベースをサポートしていません。</p>
EntireX Communicator	<p>バージョン 7.2.1 は、Adabas 8 SVC を完全にサポートし、Adabas 8 データベースを永続ストアとして使用できます。</p>

10 サポート期限

Software AG による製品のサポート期限については、Software AG の ServLine24 Web サイト (<http://servline24.softwareag.com/public/>) を参照してください。この Web ページの左側のメニューで、**[My ServLine24]** を展開して、Secured Services にログインします。ログインしたら、Web ページの左側のメニューで **[Products]** を展開し、**[Product Roadmaps]** を選択して、Product Version Roadmaps アプリケーションにアクセスします。このアプリケーションから、特定の製品およびリリースのサポート情報を確認できます。

11 ドキュメント

- Windows XP SP2 環境での Software AG 製品ドキュメントの表示 50

この製品のドキュメントは、このリリース用に更新されています。このドキュメントがさらに更新され、新しいバージョンが作成された場合は、Software AG のドキュメント Web サイト (<http://documentation.softwareag.com/>) に公開されます。このサイトのドキュメントは必要に応じて更新されます。メンテナンス契約をされている場合は、Software AG の ServLine24 Web サイト (<http://servline24.softwareag.com/public/>) のリンクから、旧版のドキュメントをご覧ください。ServLine24 のユーザー ID とパスワードをお持ちでない場合は、このサイトで説明されている手順に従って登録を行ってください（メンテナンス契約をされたお客様は無料）。

Adabas のドキュメントには次のようなものがあります。

- オンライン HTML トピック（製品のすべての特徴が説明されています）
- HTML トピックに基づいて作成された Adobe Acrobat Reader Portable Document Format (PDF) ファイル
- HTML トピックに基づいて作成された各種マニュアルの Adobe Acrobat Reader Portable Document Format (PDF) ファイル

ドキュメントのハードコピーは用意されていません。PDF ファイルと HTML ファイルをローカルのプリンタで印刷してご利用ください。

Windows XP SP2 環境での Software AG 製品ドキュメントの表示

Windows XP の Service Pack 2 (SP2) および Windows Server 2003 の Service Pack 1 (SP1) には、強力なセキュリティ機能が数多く導入され、コンピュータでローカルに実行されるアクティブコンテンツが制限されています。アクティブコンテンツには、ActiveX コントロール、Java アプレット、JavaScript などがあります。Software AG のドキュメント Web ページには JavaScript がいくつか含まれ、[SEARCH]、[INDEX]、および [CONTENTS] は Java アプレットとして実装されています。このため、Windows XP SP2 環境で Internet Explorer や Mozilla Firefox を使用して PC 上に表示されるドキュメント Web ページを見るときは、アクティブコンテンツがブロックされることに注意してください。ドキュメントのナビゲーション機能をすべて使用する場合は、アクティブコンテンツを明示的に繰り返し許可する必要があります。これは、PC の CD-ROM ドライブにある CD 上の Web ページなど、PC でローカルにインストールされた Web ページを表示するときのみ見られる動作です。

Software AG が管理するアクティブコンテンツ（HTML のドキュメントページに埋め込まれた JavaScript コード）は、お客様のコンピュータに危害をもたらすことはありません。ナビゲーションアプレットを使用する際のリスクはほとんどなく、これまでこのアプレットが原因でコンピュータに危害が生じたという事例は報告されていません。このため、Software AG のドキュメントをローカルでご覧いただく場合は、ブラウザのセキュリティ設定（Internet Explorer では、通常、[ツール] > [インターネットオプション] > [詳細設定] にあります）でアクティブコンテンツを許可することをお勧めします。

これ以外の対応方法の詳細については、ナビゲーションアプレットの提供元のホームページ (<http://www.phdcc.com/xpsp2.htm>) を参照してください。

12 以前のリリースノート

ここでは、一部の旧バージョンの Adabas について、PDF 形式のリリースノートへのリンクを紹介しています。これらのリリースノートは、最新バージョン以外の旧バージョンの Adabas からアップグレードするユーザー向けに提供されています。Adabas 8 への移行の詳細については、「旧バージョンの Adabas からの移行」も併せて参照してください。

- *Adabas 7.4.4* リリースノート
- *Adabas 7.4.2* リリースノート
- *Adabas 7.1.3* リリースノート

索引

ち

チェックポイント

Adabas ニュークリアス/ユーティリティによる書き込み,
24

